

序 文

教養文化研究所所長 廣 野 行 雄

林好雄教授が法人の早期退職勸奨に応えて定年をまたずに退職されることになった。そのため今回は、送別の辞を受けとる方が呈する方よりも僅かであるが若いという異例の形になる。二十数年来、文字どおり爾汝の交わりを許しあってきた仲であり、また上述のような事情でもあってみれば、林先生とか林教授といったのでは、まったく意を尽くさぬ文になってしまうおそれがある。そのようなわけで、この種の文の規矩に適わぬのは承知の上で、以下常日頃と同じく「林さん」と呼ばせていただくと思う。

林さんは信州佐久平の人である。同じ信州でも伊那の人に言わせると、あの辺り(佐久、上田、小諸)の人は、とにかく理屈っぽいから学者にでもしておくほかないのだ、という。たしかに思いあたる節は数々ある。何かにつけてひと言ある。しかし、私利私欲から言うのではないので、おおむね正論である。おまけに当人が頗る独立自尊の気性に富んでいる。家出でもするかのように郷里を出て大学に入ってから、仕送りなしで修士にまでなった。国立大学の学費が年間一万二千元だったころのはなしという人があるかもしれぬが、それではあなたはそうしたのか、と訊きたい。だから、東京大学の学生の多くが、裕福で社会的地位のある家庭の出身であるという、わたくしなどには、なるほどそうでもあろうかという説に対する林さんの反発の仕方はいつも異常に強いものだった。思うに、自立の意地を貫いてきた自分の学生時代が統計上の誤差の範囲や例外として捨象されてしまうことに我慢ならなかったのだろう。

それでは、林さんが強い自我を硬い甲羅でおおっただけの人かと訊かれれば、不敏にして同意できない。なぜなら彼が永年ユニセフや国境なき医師団に並大抵ではない額の寄付を続けており、また血縁関係にない老婦人の介護にあたっているのをこの目で見て知っているからである。そうでなければ、一番好きな小説のヒロインが『罪と罰』のソーニャであったり、半ば冗談にもせよ運動会の前に子供の運動靴を洗ってやるような母親が好ましいなど言うはずがないではないか。

林さんの専門はフランス文学で、研究対象がマラルメのはずなのに、何故これまで『論叢』に発表された論考や著書、訳書が道元やデリダに関するものが多いのか、

という声を時に耳にした。しかし、それは、漱石が言うように「文学書を読んで文学の如何なるものなるかを知らんとするは血を以て血を洗ふが如き手段」だからでもあろうが、何といたっても師森本和夫先生への深い傾倒の故にほかなるまい。酒量ただならぬ森本先生につきあうのは命がけだところぼしながらも、毎日のように何軒かの酒肆にお供していた。

「森本さんや寺田透(森本先生の一高時代の師)が、面白がっていることだから一生やってもいいかなと思った」という言葉は、真宗門徒のわたくしに、主知的な道元よりもむしろ「よき人の仰せを被りて、信ずる外に、別の子細なきなり」と言い切った親鸞のことを連想させた。いずれにしろ林さんが「学ぶ」ということの根底にある機微に通じていることだけは確かだと思う。そして、それはとりもなおさず彼が如何なる教師であったかをも物語っていよう。

勤めを辞めた林さんは、車に読みたい本を積んで方々を旅したいと言う。その大きな身体と重い本を積んだワンリッターカーは碓氷の坂や三国峠を越えられるのだろうか。一日に純米(酒)三合とビールと少しのつまみを食べ、と不良賢治を気取るのはやめ、いまして少し節制に努めるべきではなかろうか。お互い人生の滋味をゆっくりと味わうのはこれからなのだから。

林さん、君が毎年のように夏を過ごしていたフランスの詩人 PAUL VALÉRY は、

Le vent se lève, il faut tenter de vivre.

と詠った。僕がいささか読みかじった中国の詩李白「前有樽酒行」には、こうある。

君 立ちて舞へ 日 西に夕べなり